

安全への提言

|||||

憂いあらば備うべし

お	つか	てる	ひと
大	塚	輝	人 [†]

2024年5月より理事を務めさせていただいております。安全工学会の発展に貢献できるよう尽力してまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

私が安全工学に関わるようになりましたのは、弊所の前身である労働省産業安全研究所に職を得た30年前にさかのぼります。2025年4月には、労働災害調査分析センター長を拝命いたしました。この部署は、2006年4月に労働安全衛生総合研究所へ改組された際に新設されたものであり、その発足時に初代の末席として担当した経験がございます。また、さらに遡りますと、入所数年目に組織に対する若手の要望を取りまとめる機会をいただき、拙いながらも部署創設の意見を出したこともあり、感慨深く感じております。

研究者としては、学んだ化学を背景に、主にガス爆発に関する実験的な研究に従事してまいりました。そうした中で、予定どおりに進まない事態への備えとして、常に次善の策を準備することを意識してまいりました。

本稿「安全への提言」では、この「備え」に焦点を当てたいと思います。

「備えあれば憂いなし」という格言は、安全工学の分野において繰り返し引用されるものです。確かに、万全の対策を講じておくことは、安全確保の基本原則と言えます。しかし、先取りの備えを行うためには、事前にどれだけの想定ができるにかかっております。昨年の安全工学研究発表会でのパネルディスカッションでは、顕在化したヒヤリハットへの再発防止策を講じるだけでなく、未然防止のために現場の人たちの「気づく能力」を拡張することが肝心であると、慶應義塾大学の岡田有策先生よりご指摘をいただきました。

つまり、「備えあれば憂いなし」よりも、「憂いあらば備うべし」と考えるべきであり、いかに正しく憂えるかこそが、安全に対して求められているのです。

幸い、日本人はセロトニントランスポーターに関連する遺伝子により、悲観的、すなわち憂いを抱きやすい特性を先天的に持つ民族とも言われています。地震、台風など天災の多い地域に長く住んできたことにより、適切に憂える文化が育まれてきたと考えられます。ただし、天が落ちてくることを憂える杞の国の住人のようになってしまうのは、本末転倒であることも忘れてはなりません。

現場においては、災害やトラブルの多くが何らかの予兆を伴って発生します。計器のわずかな振れ幅、配管からの微細な音、異常な臭気、あるいは操作手順が「いつもと違う」と感じる作業者の直感、すなわち違和感こそが「憂い」の初期形態であると考えられます。しかし、それらが十分に拾い上げられず、組織的な対応に至らないことも多くあります。こうした貴重な憂いを埋もれさせないために、現場力を向上させることが安全確保には不可欠です。言い換えれば、不安や違和感を率直に口に出せる風土を醸成することが重要であると言えるでしょう。

また、拾い上げた憂いを正しく備えに転じるためには、マニュアルの整備や定期的な点検・訓練といった「見える備え」だけでなく、現場の声を受け止める柔軟で水平なコミュニケーション体制や、リスクを内在化した設計思想、さらには技術と感覚の両輪による予兆検知力の向上も併せて求められます。

特に化学産業は、本質的に危険を内包する業種であるため、違和感を感知する感度を磨き、それを起点に備えを積み重ねていくプロセスこそが、未来の災害を防ぐ最も確実な道となります。

「憂いあらば備うべし」——この考え方は、現在進行形の兆しをもとに日々アップデートされていく、動的な安全文化であるといえます。この姿勢こそが、変化の時代において生きた安全文化を築く礎になるものと考え、私からの安全への提言とさせていただきます。

[†]（独）労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所：
〒204-0024 東京都清瀬市梅園1-4-6